

政治活動家の死と作家の誕生

——シローネの処女作『フォンタマール』の背景——

齋藤ゆかり

1. はじめに

イニャツィオ・シローネ（1900-1978）は、1930年代から第二次世界大戦にかけて欧米で広く読まれたことから、日本でも終戦直後より1950年代初めにかけて、さらに今世紀初めにいくつかの著作が邦訳、紹介された。しかし、洋書に馴染む人びとを別にすれば、まだ「知る人ぞ知る」の域を出ていないイタリアの作家の一人だと言えるかも知れない。また、戦後の知識人や読書家の間では、小説家としてより、むしろスターリニズムの台頭時にいち早く共産党を離れた元幹部としての知名度のほうが高かったのではないと思われる。ともあれ、ヨーロッパや南北アメリカでは、二十世紀を代表する異色の作家として定評があった。

ところが、没20年と生誕100年を控えた二十世紀末、この人物のある意外な過去の「発見」がスクープされて、提示された一連の資料の信憑性とその解釈をめぐり論争が勃発、国内はもちろん英国や米国でもかなりの量の記事や論文、ついには伝記仕立ての小説まで複数生み出す「事件」へと発展した。

発端は、1996年の春、ローマの国立中央文書館所蔵の1930年4月13日付け警察幹部グイド・ベッローネ宛て私信で、Silvestriと署名した差出人が、じつは反ファシズムの論客として世界に名を馳せたシローネ（戦後、このペンネームへの改名が法的にも採用されるまで、本名はセコンディーノ・トランクーリ Secondino Tranquilli だった）にほかならず、作家になる前、共産党の幹部だった時代にファシスト警察に党活動の内部情報を提供していた可能性が指摘された¹⁾。

問題の手紙は、たしかに筆跡、内容、文体とも筆者の判断でもシローネのものであることに間違いなく、のちに諜報活動の証拠として挙げられた1920年代の多数の文書の中でそう断言できる数少ない資料の一つであった。

一方、この警察幹部との関係がどのような性質のものであったのかについては、論争の中で様々な仮説が飛び交ったものの、確かな手がかりは少な過ぎて推測の域を出ない。シローネが書いたと断定可能な私信からわかるのは、相手がファシズム政権誕生以前からの旧知で、ほぼ一世代年上ながら上司や雇い主などではない対等な立場にあり、1930年4月13日付けが辞去の手紙だったことぐらいである。ただ、おそらくベッローネとのやり取りを指していると思われる記述は、国家警察の長官アルトゥーロ・ボッキニが1937年10月12日付けで首相ムッソリーニに提出した反体制派の亡命作家シローネに関する詳細な報告書に見られる。それには、1928年春、家族の唯一の生き残りだった4歳下の弟ロモロ・トランクイッリがテロ容疑の冤罪で逮捕されて以降、「弟に深い愛情を抱いていたセコンディーノ・トランクイッリ（シローネ）は非常に苦しんだ。あらゆる方法で助けようとし、金銭や菓子、珍味などを頻繁に送った。この時期、

自分の反ファシズム的態度を悔いているかの様子を見せ、無償で亡命者たちの活動についてごく一般的な情報を送付してイタリア当局への接近を試みた。それは弟の力になろうという意図でしたことだったが、弟は重病に冒され1932年10月20日、プロチダ刑務所の医務室で死亡。その死後は共産主義（原文ママ）活動を全力で再開し、反ファシズム色辛辣極まる小説『フォンタマラ』を書き亡弟に捧げた²⁾と記載されている。

前世紀末から10年以上続いた論争の発言者の中には、過去にシローネを愛読したにもかかわらず、スパイ説の立場から提示された資料とその解説に刺激されて作品を読み直し新しい作家像と作品論を展開するような評論家や学者も少なくなかった。それだけ創造力を刺激する「発見」だったということなのか、この「事件」については、日本でもごくわずかながら一部の英語文献の紹介として取り上げられた³⁾。

ところが、数年前、当時の警察の資料を精査した別の研究により、証拠として示されていた資料のほとんどが、体制を抱えの本物のスパイ、アルフレード・クワリーノ Alfredo Quaglinio という別の人物に帰すべきものだったことが判明⁴⁾。要するに、諜報活動については「人違い」だったことが明らかになったのだ。以後、スパイ説の主張者たちからは明確な反論が出ていないところを見ると、議論は一件落ち着いたものと考えられる。

このように延々と続いた喧々諤々の論争が、ようやくほとぼりが冷めた頃に拍子抜けするような尻窄みの結末を迎えたさまは、新聞の一面で報じた誤報をだいぶ後になってから最後のページのべた記事で訂正するのに似て、大多数の読者に印象づけた汚名や疑惑を晴らすには至らず、当初から裏切り行為への加担に否定的あるいは懐疑的だった者にも後味の悪さを残したことは否めない。

しかし、誤解がかくも長い間、説得力をもち得た原因について改めて考えてみると、問題はむしろ現代の読み手のもつ限界にあったという印象が強くなる。言葉を、書き手の思想的バックグラウンドや当時の社会的、政治的状况から切り離して自己流に解釈してしまう危険はつねにだれにでも存在するが、シローネの場合はそれがとてつもなく現実とかけ離れた誤認を生みかねないのだ。この作家の人物像、その思想と行動、言葉の使い方にしばしば一般の常識や感覚が通用しないこと、それだけ書き手の思考に沿った読み方を要することは、過去にも何度か起きた「事件」で浮上した課題だった⁵⁾。今回の騒ぎも、読み手の先入観を再検討する必要性を顕示した出来事だったように思われる。

2. 1928年～1931年：人生最大の危機、そして、崖っぷちからの生還

さて、スキャンダルを巻き起こしたこの手紙だが、スパイ疑惑とは別に、作家シローネの誕生をたどる上で興味深い資料である。

その経歴については、最近出た拙訳の『フォンタマラ』（光文社古典新訳文庫、但し、底本は戦後の改訂版）の解説と年譜に記したので、ここでは手紙に直接関連する事象に簡単に触れてから、全文を訳出する。

1921年のイタリア共産党結党時以来、共産党の主要な若手メンバーの一人だったシローネは、ファシズム政権下で1926年以降、党が非合法になった後も地下活動が続けていた。しかし、

1927年春、パルミーロ・トリアッティとともに参加したモスクワのコミンテルン執行部臨時総会でスターリンによるトロツキー追放を目の当たりにし、共産主義が所詮赤いファシズムに過ぎないことを直感して深刻な精神的危機に陥ってしまう。一方、祖国では非体制派弾圧がさらに強化されて潜伏は不可能になり、同年7月、スイスへ避難。翌年は、密かに出国して自分のところへ来る途中だった弟ロモロがミラノで逮捕され⁶⁾、欧州でその救援活動に奔走するが、1929年には自身も病気のため党の第一線から退き療養を余儀なくされた。その後、スターリン体制の煽りを受けたイタリア共産党内でも首脳部の対立と少数派の排除がさらに進み、シローネの立場も窮地に追い込まれて、1931年夏、ついに離党（追放）に至った。（この経緯については、戦後発表されたエッセー“Uscita di sicurezza（非常口）”⁷⁾に詳しく述懐されている。）

尚、文中の下線は、原文どおりに表記した。

1930年4月13日

その後、お便りを差し上げなかったこと、お許し下さい。知りたいとおっしゃっていた件はもはや謎ではありません（新聞で話題になっています）。私と友人たちはどうしたらいいか、まだわからずにいます。私の健康状態はまったく芳しくありませんが、その原因は精神的なものです。（昨夏、お便りした内容を覚えておいでなら、わかってくださるでしょう。）生存の深刻な苦境にあるのです。これまでずっと強固なものだった良心、倫理観が、いまや完全に私を支配しています。寝ることも食べることもままならず、いつときの安らぎも与えてくれません。

良心の危機の決定的な岐路にあって、これを乗り越える道はただ一つ、黨員としての政治活動の完全放棄のほかにはありません（なんでも構わないから頭を使ってできる仕事を探します）。この解決策をおいて残るのは、ただ死のみです。これ以上、誤解の生じさせる生き方はできなかったし、もうできません。私は故郷の実直な土地所有者であるべく生まれてきた者です。生きているうちに放り込まれてしまった破滅への道から、もう抜け出したのです。良心に省みて、友だちに対しても国に対しても大きな害をもたらすような行為はしていないと言えます。これまで可能な限り悪事を為さぬよう、私はつねに心がけてきました。貴方は、その役職を考慮するなら、私に対しつねに紳士的に振る舞って下さったと言わなければなりません。それで、この最後の手紙を認めることにしました。二つの段階からなる私の計画を貴方が妨害することがないように。その計画とは、第一段階で、まず人生から虚偽や裏表や曖昧さ、謎をすべて排除し、第二段階では、過去に犯した過ちを正して償い、（私の全存在、身体の間々まで絆を感じている）農民や労働者たちにとって、そして、わが母国にとって、よいことができるように新しい土台に立ち新たな人生を始めるというものです。

この第一段階と第二段階の間で、私は肉体的、知的、精神的な休養を取る必要があります。物質面に関する考慮がこの決断に及ぼした影響は一切ありません。不自由は怖くありません。私が望んでいるのは、道義的に正しく生きることです。

国外のあちこちの移民社会で得た影響力と知名度から、（体調が回復し次第）将来の仕事として考えられるのは、完全に独立した立場での文筆活動です。私のうちで目下進行中の

思想的な大変革の中、改めて（教会とは言わないまでも）宗教に非常に惹かれるものを感じており、共産党のとりつつある愚かで犯罪的な方針が、それを助長していることも付け加えなければなりません。党を離れるのに後ろ髪を引かれる唯一の理由は、指導部を別にすれば誠実な労働者たちが何千人もいる迫害された党だということです。草の根の黨員たちへの影響を配慮して、私は党との決別を公に宣言するのをまだ躊躇し、好機が訪れるのを待っています。

この私からの手紙は、貴方に対する敬意のしるしです。長年の誠実な関係を誠実な形で最終的に閉じたかったのです。もし、信仰をお持ちなら、神様が、過去の悔いを克服して新しい人生を始め、それを労働者とイタリアのために使い尽くす力を私に与えてくださるよう、お祈りください。

シルヴェストリ⁸⁾ 拝

逸脱した解釈の誘因となったのはおそらく、ファシスト政権の忠実な僕と思しき受取人の肩書きが与え得る意外性と、*morale*（精神、道徳、倫理）、*coscienza*（良心、意識）、*equivoco*（誤解、曖昧さ）、*doppiezza*（二重、偽善、裏表、建前と本音）、*falsità*（虚偽）、*lealtà*（誠実さ、公正）、*rimorso*（良心の呵責、自責の念）、*male*（悪、過ち）、*bene*（善、ためになること）等、手紙に鏤められたキーワードの通念的理解だったのではないかと思われる。けれども、シローネの著作や言動を丁寧に分析するなら、いずれも作家が成人後はずっと維持した対話の相手を選び好みしないスタンス⁹⁾や、再定義の労も惜しまずにたびたび用いた語彙と、少しも矛盾しないことがわかるはずなのだ。本稿ではその分析には立ち入らないが、同時期の親しい友人宛ての書簡やのちに書かれた複数の回想ともほぼ一致する内容の書簡だということは明記しておく必要があるだろう。¹⁰⁾

1937年、二作目の小説『パンと葡萄酒』のフランス語版がグラセ社から刊行されて間もなく、同社のライナー・ビメルからインタビューの申し込みを受けてシローネが書いた長い手紙にも以下のような記述がある。

芸術は、私の人生において、生き続ける意欲をほとんど失ってしまった時に決定的な役割を果たしました。三十歳ぐらいの頃、身体的にも精神的にも極めて深刻な危機を通過したのです（その概要については『パンと葡萄酒』の最初のほうで、政治にうんざりしたスピーナの話として書きました）。私の危機は、もっとずっと困難に満ちたものでしたが、それを引きずりながら一年半近くにわたりサナトリウムを放浪し、最後に、たぶん貴方がトーマス・マンの『魔の山』でご存知のダヴォスに行き着きました。それまでずっとその世界で生きてきた政治に絶望してしまったので、これ以上生き続ける意味があるだろうかと自問していたのです。一年半もの間、その問いに日夜悩まされていました。皮を剥がれる人間のように、私の全存在が痛みで苦しんでいました。友人たちは何度も私が命を落とすのではないかと考えたほどでした。

立ち直ることができたのは、『フォンタマレー』と『パンと葡萄酒』、そして、まだ出版されていない作品のおかげです。それは、困難であると同時に精神衛生に有益な、ちょう

ど新生のようなものでした。¹¹⁾

あらゆる面で苦境にあったシローネの胸中について新たな裏付けともいえる警察幹部宛ての私信が書かれたのは、ちょうど最初の小説『フォンタマール』の執筆期と重なる。つまり、処女作誕生の背景理解にも役に立つ資料としても興味深いのだ。

この危機の克服と政治活動家から作家への転身について、シローネ研究の草分けだった米国のイタリア文学研究者リチャード・ルイスは次のように分析している。

1930年から1931年にかけて、シローネは、政治から芸術への転身という手段によってのみ可能な、政治の愛への変換という大胆なプロセスに取り組んでいた。それがシローネにとっての救済の道になった。[中略] シローネは、自身の共産主義からの離脱を青春の喪と表現した（二十世紀の曙に生まれた彼は、1931年に31歳だったことを念頭におくとよい）。ヨーロッパのほかのインテリたちの多くにとって、それはすべての死、精神と、しばしば意図的な身体の死を意味した。[中略] シローネの幸運は、共産主義の理想がそれまで日々与えてくれていた紛い物の恩寵に代わるものを、自分自身の中に見出すことができた点にある。ほかの背教者たちのほとんどが死ぬしかなかったところで、シローネは、ある意味で再生しながら死ぬことに成功したのだ。それは、共同体の探求、何処にしようとも自由で信頼のおける人間たちの見えない共同体の探求からなる再生であった。¹²⁾

3. 小説仕立てのファシズム報告

小説『フォンタマール』は、執筆当時（1929～1931年）のイタリア中部アブルッツォ地方とローマを舞台に、ファシズム体制下でそれまで以上に徹底して虐げられ蔑まれ搾取され続ける寒村の農民の悲惨な運命を、スイスに亡命中の著者の元に命からがら逃げ込んできた三人の百姓一家が語るという設定の物語である。チェルヌイシェフスキーやトルストイ、レーニンを想起させる台詞「どうすりゃいいんだ？」¹³⁾の連発で物語が終わるのは、あらゆる辛酸を甘受してきた貧しい農民にとって、疑問を投げかけること自体が意識の目覚めを象徴するからであり、問いを許容せず答えだけを一方的に叩き込む全体主義に対する挑戦を意味しているのだ。¹⁴⁾

この作品を手がける前、シローネは10代の終わりから社会党の新聞、雑誌の編集に関わり始め、次いで共産党へ移ってからも、宣伝活動と党の機関誌などに載せる報告書の取材調査と執筆に従事していた。最近の研究によると、もとはと言えば『フォンタマール』も文学という体裁の共産党プロパガンダとして着想されたもので、当初、献辞にはイタリア南部の農民の啓蒙活動中に逮捕投獄された中北部出身の党員たちが名を連ねるはずだったらしいが、なぜ表現形式に小説を選んだのかについて作者は、「政治論文や記事ではすべてを言い尽くせない、どうしても網羅しきれない現実があるから」¹⁵⁾で、以前書いたものと異なるのは形だけだと説明している。

実際、シローネは、この小説とほぼ同時並行して1920年代に党のために行った実地調査を元にファシズム論をまとめていた。1934年にドイツ語で刊行された『ファシズム その起源と発展』を読むと、『フォンタマール』の中で展開するファシズム独特の具体的な事象が空想の産物では

ないことがわかる。最近出たこの小説の邦訳は1950年前後にかなり手を入れ古典として生き残れるような普遍的な文学作品に仕上げた戦後の改訂版のほうだが、1933年刊行の戦前版ではファシズムとファシストの生々しい実態描写に多くのページが割かれている。

その一例が、全体的な流れを損なうと考えた著者により戦後版で丸ごと削除されたペッピーノ・ゴリアーノのエピソードだ¹⁶⁾。

ある日、占い師風の老人がフォンタマラにやって来て、その35年ほど前、結婚資金を貯めるためにローマに出稼ぎに行ったきりの村民ペッピーノ・ゴリアーノという者の遍歴を語り始める。首都で貯金はおろか食うや食わずの生活を強いられたペッピーノは、盗みや詐欺、物乞いと刑務所暮らしを交互に繰り返す羽目になるが、何度目かの出獄時に、即刻ローマを退去するか、それとも警察の命令どおりに「政治のため」の行動をとるかの選択を迫られて「政治のため」を選んで以降、運が好転する。最初はデモや集会で言われたとおりに叫び叩きのめされては手当を受け取っていたのが、そのうちデモ隊を叩くほうに栄転して手当も増加、ついには反体制派の新聞編集部を襲撃する一団に加わり英雄的存在にまでなった。ところが、やがて風向きが変わって刑務所暮らしの経験者はクビになってしまう。こうして再びどん底の暮らしに戻ったペッピーノは、ローマの空気も以前とは異なり理由不明の悪臭と恐怖が立ち込めるようになったことを感知する。占い師風の老人曰く、「みんなが恐怖に取り憑かれると、もう訳がわからなくなっちゃうんだ。頭のとっぺんから爪先まで恐怖が支配しちゃうのさ。怖がってるのは政府の敵ばかりじゃない。他の連中、いわゆるファシストのほうがよく怖い思いをしちよる。その連中もこんな調子じゃやってられんとわかっててそう言うんだが、怖いさ。なんで敵を殺すのかって？ 怖いからだよ。警官や兵士の数が増えるのはどうしてかって？ 怖いからさ。どうして何千人もの罪ない人間を牢屋に入れるのか？ 怖いからなんだ。悪いことをやらせばやらかすほど、やつらの恐怖はでかくなる。恐怖がでかくなればなるほど、悪事も増えるのさ」¹⁷⁾。やがて政府は貧乏人を点検し直し、その怖さをチェックして、毎週何百人かを捕まえては郷里に送り返すようになる。というわけで、この占い師風の老人も、じつは首都追放と帰郷命令を受けたペッピーノ・ゴリアーノその人だと判明する。政治に疎い田舎の貧しい百姓の目に映ったファシズムとは、こういうものだったのだ。¹⁸⁾

1933年版の『フォンタマラ』が、とくにイタリア国外にいた読者にとってはファシズム政権の宣伝ではない実態を知るための貴重な情報源になっていたことは想像に難くない。イギリスでいち早く書評を書いたグラハム・グリーンは、「私がこれまでに読んだ中で最も恐るべきファシズムの蛮行の報告書」と評してこの体制がナチスほど怖くないものだと見なす人々に勧め、米国でもムッソリーニ政権下の実情とファシズムの正体を暴く作品として広く読まれ、劇化もされた。

一方、原語版が禁書に指定されていたイタリアでは、英語版、フランス語版、ドイツ語版などが密かに持ち込まれ、フランス語版からイタリア語に翻訳したものが一部で回し読みされることもあったようだ¹⁹⁾。こっそり読んだ知識人の中には、戦後すぐにイタリアでの出版に関与したエルネスト・ブオナイウーティ(1881～1946)²⁰⁾のほか、シローネと同様、アブルッツォ出身で戦後間もなく共産党の国会議員も務めた評論家のブルーノ・コルビ(1914～1983)がいた。コルビは後年、ドイツのテレビ局によるインタビューで次のように証言している。

『フォンタマーラ』は、1934年にパリで印刷され、こっそりイタリアに持ち込まれた廉価版で読んだ。目から鱗が落ちる一冊だった。…当時、大学生でマルクス主義の勉強に没頭していた私は、ドイツやイギリスやフランスのプロレタリア闘争についての知識はかなりあったものの、生まれ故郷の農民の生活については全くと言ってよいほど知らなかったのだ。…

その後、フーチノの農民は勝利を収めた。死者も出たけれども、人間の尊厳を獲得したのだ。確かに、私はその闘争を指導した一人だったことを名誉に思うが、しかし、成功の手柄の大半は、身近な現実と何をすべきかについての理解を助けてくれたシローネにあることを認めずにはいられない。²¹⁾

4. 『フォンタマーラ』における自伝的要素

この作品誕生の背景を理解する上で注目すべきもう一つの点は、物語と作者の個人的体験との関係であろう。

二作目の小説『パンと葡萄酒』（1936年、もしくは戦後版『葡萄酒とパン』1955年）とその続編で三作目の『雪の下の子』（1941/1961年）、政治鼎談の『独裁者の学校』（1938/1962年）、さらに戦後書かれた『ルーカの秘密』（1956年）に関しては、いずれも作家自身の体験をはっきり反映する作品として読まれてきた。

それに対し、処女作『フォンタマーラ』は、主人公のベラルド・ヴィオラと獄中死した作家の弟ロモロとの共通点の指摘はあっても、自伝的な小説として読むアプローチはこれまであまりなかったように思われる。

この小説執筆当時の心境について、シローネは後にこう振り返る。

…1930年、病を抱えてスイスの山村に逃げ込み、もう余命いくばくもないものと信じて、「フォンタマーラ」と名づけた物語を書き始めた。苦い思い出と想像を材料に自ら村を築いて、私自身もその中で暮らすようになった。出来上がったのはかなりシンプルな物語で、正直に言って粗野なページもあったのだけれど、原動力となっていた深い郷愁と愛が、予期せぬことにさまざまな国の読者を感動させたのであった。²²⁾

出版の当てどころか書き終えられるかどうかともわからないまま、残された時間を使って「おのれと生まれ故郷の真髄を込めた村を自分で拵えて、せめてふるさとの人たちの間で死ぬるように」²³⁾と急いで書いたものだったようだ。

少年時代には身近で今は遠く隔たった存在になってしまった「ふるさとの人たち」や「苦い思い出」をこの小説の中に読み取るのは可能だろうか。

決して多くはないがヒントを与えてくれるのは、先に引用したルイスの著書“Introduzione all'opera di Ignazio Silone（イニャツィオ・シローネの著作への手引き）”と、作家の従姉の孫娘の一人マリア・モスカルデッリ編集監修による“La coperta abruzzese（アブルッツォの毛布）”の家族の証言と思い出を集めた章だ。

ルイスのシローネ論は、もともと1900年前後に生まれた世代の作家六人（モラーヴィア、カミュ、シローネ、フォークナー、グリーン、マルロー）に関する評論を集めた *The Picaresque Saint* (1959) の中核をなすシローネの章が、作家自身の要望で若干の訂正と加筆を経てイタリア語に翻訳されたもので、単行本になった最初のシローネ研究書である。筆者は1950年代に度々欧州に滞在した際、何度も作家に会い親交を結んでいる。存命の親戚や地元の人々から得たと思しき家族に関する情報で印象に残るのは父親像だろう。

裕福な土地所有者の家に生まれたものの、大勢いる子どもの末っ子だった父パオロは、不景気な時代と運の悪さ、正義感の強さゆえに苦労することが多かった。友だちとワインが好きで、そのためなら法を無視することも厭わなかったという。40歳で病死する前の年には、病害でやられた葡萄畑を処分してブラジルに出稼ぎに向かったものの、下船したりオデジャネイロでストライキ中の労働者を弾圧する警察と、下船したばかりの移民たちへのスト破りの呼びかけを目撃。憤慨して最初の船でイタリアに戻って来てしまった。

この父親像は、モスカルデッリの集めた同年代の親戚たちの証言と少しも矛盾しない。兄弟の中で最も独立心が強く落ち着きがなくて迎合主義を嫌う性格のパオロは、知り合いでなくても困っている人がいれば介入し、いつも弱い立場にあるほうの味方をした。大の働き者だった点是一家に共通するが、考え方、人生観に関しては、家族をはじめほかの大多数の人々とは大いに異なり、自分と関係がなくても不正や横暴が行われるのを見れば黙ってはいられない質だったらしい。

エッセー集『非常口』（1965）に収められた子ども時代の回想“Visita al carcere（刑務所を訪れて）”、“Chioma di Giuditta（ジュディッタの髪）”さらに本と同題のエッセーの前半、子ども時代の回想の中で描かれている父の言動は、断片的とはいえ非常に印象深く、これらの証言と合わせると父親像がより立体的になる。貧しい人々に対する偏見から自由で正義感が強く妥協をよしとしない、誇りが高く頑固な人物。モスカルデッリが年配の親戚から聞いたところによると、地元のほかの父親たちとは異なり子煩悩で、よく子ども（とくにセコンディーノ）を連れて出かけたという。そんな父が少年シローネの人格形成にいかに大きな影響を与えたかは、回想の中で描写されている作家の当時の反応やその後の人生からも容易に想像できる。が、同時に、稀に見る働きぶりや正義感に根ざした非妥協的態度、友だち第一の気質が、『フォンタマラ』の主人公ベラルドを想起させるとは言えないだろうか。

もう一点、シローネ自身の幼年時代との接点を見出せるのは、ヒロインの名前 Elvira で、幼くして亡くなった最初の妹と同名である。

主人公のベラルドという名前も、アブルッツォ地方の内陸地域マルシの守護神聖ベラルドに捧げられたシローネの郷里ペシーナの丘の頂に立つ聖ベラルドの鐘楼と必然的に結びつく。ちなみに、作家は遺言で遺骨をその鐘楼の下に埋葬してくれるように頼んだ。

たしかに、獄中死した弟ロモロが小説に落とす影は大きい。ただし、主としてベラルドがローマで投獄されてからの姿であろう。少年期、青年期のロモロは、様々な証言や兄との手紙のやりとりから推するに、10歳で孤児になって以来、父親代わりの存在であり続けたセコンディーノ（＝シローネ）に倣うのに余念がなかったようである。もっとも、性格的には兄のような思索タイプではなくて本能的、スポーツが得意で活発だが、努力型だったようには見えない。そ

んな弟の性向を承知でか、兄は度々、自分を真似て政治に関わる弟を諭し、この問題に関しては語調を強めて警告することも厭わなかったそうだ²⁴⁾。そう言われてみると、離党をめぐり悩んでいたシローネが「非常口」で弟の逮捕と共産党所属の自白に関してこう書いている胸中が想像できそうだ。

この運命に悲劇的深刻さを付したのは、逮捕されるまで弟が共産党の党員ではなかったことだ。入党を希望したことも党員として受け入れられたことも、その集会や活動に参加したこともなければ党則や計画すら知らなかった。カトリック教育を受けその精神を抱く、どちらかという反ファシスト的な若者だった。政治よりもスポーツのほうがはるかに好きで、それが生まれつきの自尊心に名誉を重ねる独特の感情を付与した。なぜ、共産党員だなどと自白したのだろうか？ どうして十二年の獄中生活を言い渡されるような自白を特別裁判所の法廷でも認めたのか？ 私にくれた手紙に彼はこう書いている。「もし兄さんが僕の立場だったらどうしただろうかと想像してみて、そのとおりにしようと努力した」。弟の自主的な犠牲を無駄にしないために私の存在が必要かもしれないと思うと、党から離れるのは簡単な話ではなかったのである。²⁵⁾

もっとも、ほかの身近にいた人々の証言によると、ロモロは少年時代から共産党のシンパと思しき言動にこと欠かず、とくに反教會的な態度は物議を醸すほどだったとの証言は少なくないようなのだが、それが、大半の時期、離れて生活していた兄の耳にどの程度入っていたのかわかるのは難しい。

ところで、タイトルの「フォンタマーラ」の由来は、モスカルデッリによると、代々織物職人をしていた母方の家族の住むペシーナの周辺地区の名前だったという。スイスに亡命中、家族ぐるみでつきあいのあったフランカ・マニャーニが少女時代に作家から聞いた話では、大地震まで住んでいた通りの名前だったらしい。そう呼ばれていたのはそばに泉があったからで、幼い頃、セコンディーノはよくそのほとりで家畜たちと過ごし、15歳までその水を飲んでいたという。「泉の水は苦くなかったけれど、その地の農民の暮らしはとても苦いものだった」²⁶⁾。通りにせよ地区にせよ、思い出多き場所の名が苦い水を意味していたとは、あたかもこの小説の誕生を予言していたかの印象すら与える。

5. おわりに

シローネの政治から文学への転身の橋渡しとなった小説『フォンタマーラ』。ちがうのは形だけという作家の当初の意図とは裏腹に、それは予想を大幅に上回る大きな変化を生み出した。

まず何よりも読者の広がりだ。いわば遺言のようなつもりで書いたものが、戦前版はわかっているだけで二十もの言語に翻訳され、その中には中南米諸国で独自に訳された3種類のスペイン語版があった。戦後の版は、1970年までに二十数ヶ国語の翻訳が出ていることが確認されている。

イタリアの地図にもない辺鄙な山村での物語が、かくも広い地域で多数の読者層を獲得し得

たのは、著者に言わせると、貧しく虐げられた人々の普遍性を示していたから。なぜなら、国によっては翻訳が検閲に自国の実話を暴露するための隠れ蓑の手段ではないかと疑われ、そうではないことを納得させるのに苦労したという話を聞いたのである。

機関誌に掲載されるような記事や政治論文よりも、文学という形式のほうが現実の描写には適していると考えて書き始めた小説が、結果的により幅広い読者にも届いたのは、人との対話、読者との関係をことのほか重視したシローネにとって、極めて幸運な選択だったと言えるだろう。²⁷⁾

読者の広がりについては、面白いエピソードがある。グラスゴー大学のシローネ研究者アイリーン・ミラーが1990年代の半ばにロンドン行きの飛行機で隣に乗り合わせた、明らかにスコットランドのcafone（どん百姓）と思しき老人との会話。飛行機に乗るのは初めてだという人を落ち着かせるために始めたおしゃべりが一通り済んだ時、老人が彼女の読んでいるダンテについての本を見て、すかさずこう言った。「わたしは、ダンテについては何にも知らないんだ。イタリア人の書いたもので読んだことがあるのは、シローネだけでな。『フォンタマレー』ってゆう素晴らしい本を書いたんだよ。あんた、聞いたことあるかね？」²⁸⁾

注

- 1) ローマの国立中央文書館に保管されたファシスト警察とシローネの関係の資料の最初の調査は、1996年3月にスタンフォード大学フィレンツェ分校で開かれた学会で、現代史研究者ダリオ・ビオッカが報告。この手紙を最初に取り上げたメディアは同年4月30日の日刊紙ラ・レブブリカだった。作家の生誕100年にあたる2000年には、そのスパイ活動を断言するD. Biocca, M. Canali, “L’informatore: Silone, i comunisti e la polizia”, Milano, Luni が刊行された。
- 2) 国立中央文書館, Pol. Pol. (政治警察), 個人ファイル b. 1370, Tranquilli Secondino. ファシズム政権の秘密警察OVRAは、危険と見做した人物について、つねに複数の諜報員から情報を集めていた。情報提供者によって状況判断にかなりの差異が見られ、シローネの場合も、1930年代後半に危険度が高いとして即刻抹殺の必要性を訴える者もいれば、病身であり孤立しているので影響力は低いと見なす報告者もいたらしい。
- 3) アレクサンダー・スティレ (2001) 「裏切ったスパイ」, 『ニューヨーカー』2000年5月15日号の抄訳「シローネにもファシズムの影」, 『アスティオン』55, 214～217。かなり詳細に取り上げているのは、平松良康 (2014) 「シローネのスパイ問題」『大阪学院大学通信』45 (9), 727-760
- 4) Alberto Vacca (2015), “Le false accuse contro Silone”, Milano Guerini; 文書館に保管されている資料の写真を豊富に用いた解説は、<https://www.yumpu.com/it/document/read/56545066/alberto-vacca-il-dossier-silone>. Alfredo Quaglino (1894～1972) は、トリノ出身のエンジニアで新聞記者、写真家。社会党、共産党所属のジャーナリストの立場を利用し疑惑を招かずに関員たちの写真を撮影するなどして、1922年から1932年までファシズム政権の秘密警察の有給諜報員を務めた。
- 5) シローネが言葉に託す意味と読者の受け止め方については、米国の文学者で最初のシローネ研究書を書いたリチャード・W. B. ルイスによる以下の指摘が興味深い。

ある優秀なイギリスの批評家に言わせると、シローネは翻訳のほうが評判がいい作家の類に属しているそうだ。これは正確ではないけれども、いくらかの真実は含んでいる。すなわち、シローネは、イタリア語が母語ではないために生まれた時からよく使われる言い回しや伝統的なリズムに馴染んでいない人のほうが、よりよく味わえるのだ。それとほとんど同じように、イギリス人よりイタリア人やフランス人の読者のほうが、ウィリアム・フォークナーの言葉の使い方にちゃんと注目しや

すい。」Lewis, Richard W. (1961), “Introduzione all’Opera di Ignazio Silone”, Roma, Opere Nuove. 68.

- 6) ミラノ近郊コモにおけるロモロ・トランクイッリの逮捕は、1928年4月13日（ベッローネ宛て私信の日付のちょうど2年前）、前日にミラノの博覧会場で起きたテロ事件（同地を訪問中の国王を反ファシストが狙ったとすぐに報道されたが、実は捏造。国王は無事で18名の死者と多数の負傷者を出した）への加担容疑だった。警察は当初から、この件で一斉逮捕された共産党員たちの関与を疑問視。ロモロ逮捕の本当の狙いは、すでに1926年から指名手配され、本件では共犯容疑で起訴された兄シローネを狙ったものとの説もある。ロモロは逮捕直後の拷問の後遺症と過酷な獄中生活が原因で1932年10月に獄中で病死。
- 7) 1949年秋、“Un’uscita di sicurezza”のタイトルで *Comunità* III, 5, settembre-ottobre 誌上に発表され、翌年明けに、他の五人の元共産党員の回想とともに編纂された単行本 Richard Crosmann 編 “The God That Failed. Six Studies in Communism”, Hamish Hamilton, London が出た。邦訳は、まず同年に「神は躓けり 私はずなぜ共産主義をすてたか」のタイトルで『日本評論』25 (9), 94-107 に、単行本の翻訳は、リチャード・クロスマン編 (1950)『神は躓く』村上芳雄、鎌田研一 共訳。青溪書院が紹介された。原語では、その後1951年に、かなりの加筆を経て“Uscita di sicurezza”が単独で刊行され、さらに若干修正されたテキストが1965年、自伝的エッセー集 “Uscita di sicurezza”, Vallecchi, Firenze, 55-115 に収録された。
- 8) シローネは、Silvestri という偽名を1928年から翌年にかけて共産党内のやり取りに使用した形跡があり、同じ偽名で党に隠れてファシズム政権のためのスパイ行為をはたらいたとは考えにくい。この手紙は、注ivのリンクの文書644ページから647ページに現物の写真と書き写しがある。
- 9) 相手の政治的立場がファシストだというだけの理由で接触や対話を拒否することがなかった様子は、手紙や行動、のちの発言から容易に想像できる。たとえば、1930年11月、共産党の先輩でスターリン路線に異議を唱えて前年に党から追放された親友アンジェロ・タスカに、ドイツの出版社のために準備中のファシズム論をタスカの住むフランスでも出せないか相談した手紙では、「共産党シンパ向けに書いたものだけれど、ブルジョワか、あるいはファシストの出版社でも、出したいというならば全くは全然反対しない」と書いているほか、二作目の小説の戦後版『葡萄酒とパン』でも、神父に扮した反ファシストの主人公に「誠実なファシストなら、共産主義者やアナキストと話すのを恐れるべきではない」と言わせている。また、ムッソリーニについては、戦後、雑誌 *Epoca* のインタビューで、「私自身は直接会ったことが一度もなく、おそらくそのせいで最初から憎悪や軽蔑の感情を抱かずに闘うことができた」と述べている。同様の態度は、共産党を離れた後の共産党員やカトリック教会の人々との関係についてもうかがわれ、人付き合いでは、もっぱら政治思想よりも人間としての誠実さや裏表のなさを重視していたことを裏付けるエピソードが多い。
- 10) 例としては、これとほぼ同時期にタスカに宛てて書かれた手紙や、1942年末、亡命先のスイスで禁じられていた政治活動を行なったために投獄された際にスイス警察当局に提出した覚書 Silone, Ignazio (1979) “Memoriale dal carcere svizzero”, a cura di Mercuri, Lamberto, Lerici, Cosenza., 戦後書かれた前述のエッセー『非常口』などが挙げられる。ことに1931年6月、タスカに宛てた手紙にある記述は、警察幹部宛ての最後の手紙に通じるものなので、以下に引用を和訳する。

…ほくに関して言うと、もう充分「追放」の機が熟していると思う。前は、つい最近までそうではなかったというか、労働者運動全体を立て直すのに好ましい状況になるのを待つ間、まだ党に残って草の根に役立つことができるのではないかと幻想を描いていたんだ。こうした幻想さえなければ、機関誌による攻撃や侮辱に黙って耐え忍ぶなんてことはしなかった。けれども、そうしているうちにほんとに党の聖職者の隔たりが大きくなって、それが細かい問題やら戦術やら、ほくにとってはどうでもいい「名誉ある標語」についてじゃなくて、根本的な問題に関わることになった。[中略]（ほくがカトリック教会から離れた時も、機が熟すのにはすごく時間がかかって窮屈で苦しく混乱を伴った、いわば第二の誕生みたいなものだった。心理的な見地から言えば、共産党という教会から

離れるのにも、まるで第三の誕生みたいに同じ困難を克服しなければならなかったんだ。)

今は、共産主義インターナショナルの外で組織された非主流派のどこかのグループに合流する気は微塵もない。グループや諸派の利点を否定するわけではないけれど、はく自身はイタリア、イタリア南部のことで頭がいっぱいで、南部の労働者や農民たちの間でやりたい政治活動にとって、それらのグループに所属するのはなんの役にも立たないだろうから。…

尚、タスカ宛ての書簡のオリジナルはミラノのジャコモ・フェルトリネッリ研究所に保管されているが、FT-FS もコピーを所蔵。二人の往復書簡は、Bidussa, David, "Dialogato per un rinnovamento socialista. Un carteggio degli anni Trenta tra Ignazio Silone e Angelo Tasca". in *Annali 1985-1986. L'Irpinia nella società meridionale*, Tomo I. にも収録されている。上の引用は、637-638。

- 11) 1937年9月2日、原文はフランス語。フィレンツェのフィリッポ・トゥラーティ研究所シローネ文庫（以後、FT-FS）蔵。I. Silone, *Romanzi e saggi, I*, a cura di B. Falcetto, Milano, Mondadori, 1998, pp. 1369-1378 にイタリア語訳を添えて収録)
- 12) Lewis, Richard W. (1961), "Introduzione all'Opera di Ignazio Silone", Roma, Opere Nuove. p. 51-52 作家が自分の少年時代の反抗精神を正義に対する愛と不正に対する義憤との接点だったと説明したことを受けて、ルイスは同書で、「シローネが政治体験の大地震を生き延びることができたのは、彼の献身が憎悪よりも愛に支えられていたからだ。人間の存在そのものから切り離せない愛なので、その核をなし、幻滅にも揺るぐことのないものである」とも主張している。
- 13) チェルヌイシェフスキー「何をなすべきか」(1963年)、トルストイ「われら何をなすべきか」(1886年)、レーニン「何をなすべきか」(1902年)。尚、戦前版(1933年刊)の『フォンタマラ』では、問いがトルストイと同じ二人称複数 *Che dobbiamo fare?* なのに對し、戦後版では非人称の *Che fare?* に変更されている。
- 14) 前述のビーメル宛ての手紙(1937年)でシローネは、「問うだけで答えを出していないとの批判を受けましたが、今日、重要なのは問いを發することだと思います。プロパガンダの国では質問は禁じられています。問いはなくて答えのみ、あるのは一方的な答えだけです。(プロパガンダの国でいちばん重要な要件である) 拡声器には、問いを聞く耳はなくて、答えを提供する馬鹿がかい口しかありません。」と述べている。
- 15) 1931年1月22日付けチューリッヒのシローネからパリのアンジェロ・タスカへの手紙。引用部分は、注9に挙げた往復書簡の633。
- 16) I. Silone (1942), "Fontamara", Londra, Jonathan Cape, 91-105.
- 17) Ibid.104
- 18) 戦後版の『フォンタマラ』からそっくり削除されたこのエピソードは、"Eroe di Porta Pia (ピア門の英雄)" のタイトルで、2018年、Liliana Biondi 監修の "Ignazio Silone. Tre racconti sull'emigrazione (三つの移住物語)", L'Aquila, Une Group Ed. 43-58 に収録。
- 19) M. Cifarelli (2004), "Libertà vo' cercando... Diari 1934-1938", Soveria Mannelli, Rubbettino 後年、司法官になったミケーレ・チファレッリ(1913-1998)の日記。著者がフランス語版からイタリア語に翻訳したのは、フィレンツェのグイド・カロージェロを中心とする反ファシストグループとの繋がりがあった恩師に頼まれてだったという。
- 20) ローマ大学の神学の教授。1931年、ファシスト政権が国立大学の教授に体制への宣誓を強要した際、拒否して教壇を追われた十数名の教授の一人。
- 21) FT FS Serie III Recensioni UA 1 "Fontamara recensioni in italiano" に保管されている書き起こしの原稿の拙訳。
- 22) Silone, Ignazio (1949-1964), "Pena del ritorno (帰郷の苦しみ)", エッセー集 "Uscita di sicurezza" に収録。
- 23) 1958年に執筆され、1960年に雑誌 *La Giustizia* が5月1日号に "Il segreto dello scrittore (作家の秘密)" のタイトルで掲載したものが、同年に刊行された戦後版の英訳に序文として加えられた。

- 24) Moscardelli, Maria, 監修 (2000), "La coperta abruzzese. Il filo della vita di Ignazio Silone", Roma, Aracne. 245
- 25) Silone, Ignazio (1965), "Uscita di sicurezza", Firenze, Vallecchi (2001 年のモンタドーリ社ペーパーブックでは, 108-109)
- 26) Magnani, Franca (1991), "Una famiglia italiana", Milano, Feltrinelli. 98. 邦訳: フランカ・マニャーニ (齋藤ゆかり訳 1993) 『亡命家族の肖像 ムッソリーニのイタリアを逃れて』朝日選書. 130
- 27) 1954 年 3 月に作家が書いた短い 40 の自問自答の冒頭は, 以下のとおり。
- Q: 書く理由は？
- A: 伝えたいから。
- Q: 書くときに, 好んで念頭におく読者は？
- A: 孤独な男性と女性, 考えるのを厭わない人, 不安に駆られている人。
- Q: 書いた本で彼らに提供できると思うのはどんなもの？
- A: いくばくかの相伴。
- Q: たまにしか読まないような読者には？
- A: 疑念の種。
- Q: 批評家のことはどう思う？
- A: この世界には, だれにだって居場所がある。
- "40 domande a Ignazio Silone" in Silone, Ignazio (a cura di Falcetto, Bruno, 1999), in "Romanzi e saggi II", Milano, Mondadori, collana Meridiani. 1111.
- 28) Millar, Eileen A. (1996), "British Reactions to Silone (with particular reerence to Fontamara)", Quaderni d'italianistica. official journal of the Canadian Society for Italian Studies, Vo. XVII N. 2, 124

